

山本周五郎

風流太平記



風流太平記

山本周五郎

新潮社
版

河盛好蔵
奥野健男 監修
土岐雄三

© by Kin Shimizu.
Printed in Japan
1969



風流太平記 (山本周五郎小説全集4)

昭和四十四年十二月二十五日発行
昭和五十四年二月二十五日十八刷

定価 一二〇〇円

著者 山本周五郎
著作権者 清水きん
発行者 佐藤亮一
印刷所 三晃印刷株式会社
製本所 大口製本株式会社
発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(03)二六六一五一
編集部(03)二六六一五四一
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

風流太平記

変 事

一

九月中旬のある晴れた日の午後。

芝新網にある紀州家の浜屋敷の門前へ、一人の旅装の若者が来て立った。長い旅をつづけて来たものとみえ、肩へかけた旅囊（ツツミ）も、着ている物も、すべて汗じみ、埃まみれであるが、笠をぬいだところを見ると、いま洗面したばかりのように、さっぱりと冴（さ）えた顔つきをしていた。

眼鼻だちはきりつとして、ちょっと強情らしく、きかない性質のようであるが、やや尻下りの眼や、口尻の切れあがった唇のあたりに、人をひきつける一種の魅力があった。背丈は五寸たっぶり、中肉でひき緊（ひきしめ）った、敏捷（びんせつ）そうない軀（からだ）であった。

彼は笠をぬいで、門番小屋のほうへ近づいていった。

そのとき、向うの町角から、一人の少年がこちらを覗（のぞ）いた。どうやら彼のあとを跟（つ）けて来たものらしい。若侍が番小屋に近づくと、さりげないそぶりでこっちへ出て来た。年は九つか十であろう。古びたためくら縞（は）の、綻（は）びだらけの袷（あ）に三尺をしめ、摺（す）り切れたわら草履（ぞうり）をはいている。色

が黒く、眼がまるく、いかにも「悪童」といった感じであった。

少年はゆっくりと、門の前を通りぬけた。それは、若侍と門番の話を聞くためのようであった。そのまるい眼がすばやく左右に動いていた。

「紀州さまお浜屋敷でございますな」

と若侍は門番に云った。

「甲野殿を訪ねてまいった者ですが、通って宜しゅうございますか」

「失礼ですが御姓名をどうぞ」

老人の番士がもの憂げに云った。

「長崎からまいった花田万三郎という者です、休之助の弟で、手紙が届いている筈です」

「すると、——」

老番士の顔が驚きのために緊張した。

「するとお手前さまは、甲野休之助殿をお訪ねでございますか」

「そうです」

「それはそれは」

老番士は声をはずませた。すぐにはあとが続かないらしく、瘦せた頸の大きな喉ぼとけを三三度も上下させた。

「こののと仰しゃったので、ほかのこの、さまかと思いましたが、甲野休之助さまだとすると非常にお気の毒でございます」

「甲野がどうかしたのですか」

「ゆうべ自火をお出しなさいましてな、夜半の、さよう子ノ刻半（一時）ごろでございましたろ

うか」

「自火というのは火事ですか」

若侍はじれったそうに訊き返した。

「さよう、とつぜんの出火で」

老番士は舌っ足らずな口ぶりで続けた。

「まったくとつぜんの出火で、それともたいそう火のまわりが早かったものですから、人が出てみたときは貴方もう、屋根が焼けぬけておりましてな、まるでもう手のつけられないありさまでして」

若侍は辛抱ができなくなったらしい。

「それでいったい家人はどうしたのですか」

「つまり、お気の毒と申すのはそのことでございますが、御一家ぜんぶ御焼死なさいましたようで——」

若侍はあつと口をあけた。

二

「な、なんですって」

花田万三郎という若侍は吃どって云った。

「それは本当ですか、主人の休之助もですか」

「御尊父も御息女も奥さまも、みなさませんぶ」

老番士がそう云いかけたとき、門内の奥のほうから、侍が二人こっちへやって来た。どうやら番士と話している万三郎を認めたものらしい。万三郎は気がつかなかったが、老番士がそれを見て、

「ああ、いまあれへ消火のお係りがおいでなされます」

と云った。しかしそれより早く、万三郎のうしろへさっきの少年が走って来て、

「小父さんお逃げよ」

と叫びながら袖を引張った。

「逃げるんだよ小父さん」

「なんだ、どうしたんだ」

万三郎は袖をふり払おうとしたが、少年は力任せに引張りながら叫んだ。

「逃げるんだってば、捉まると小父さんも殺されちゃうよ、早く逃げるんだよ」

けんめいな表情であった。

万三郎は向うを見た。老番士はあつけにとられていたが、奥のほうから来る二人の侍は、こっちのようすに気づいたとみえ、なにか叫びながら急に走りだした。

——これは変だ。

万三郎はそう直感した。

「小父さんのほか」

少年が悲鳴のように叫んだ。

「捉まっちゃうじゃないか、ばか、ばか」

万三郎は走りだした。少年は、こっちだよと叫びながら、先になってつづてのように走ってゆ

く。万三郎も片手で刀を押え、片手では旅囊の紐を押えながら、少年のあとを追ってけんめいに駆けていった。

「――待て、待て」

うしろで声がした。

――これはどういうことだ。

走りながら万三郎は思った。

――まるで狐に化かされたようじゃないか。

舟入り堀に沿った道を、浜松町の通りへ出て曲るとき振返って見ると、紀州家の侍二人は、十二三間あとから追って来る。

「お待ちなさい」

なぜ逃げるんだ、と叫んでいる声も聞えた。二丁目のほうへ曲るとすぐに、少年が走りながら振返った。

「小父さん築地を知ってるかい」

「――」

「築地の飯田町さ」

「ああ知ってるよ」

「それじゃあね、そこに増六っていう船宿があるからね、あとを跟けられないようにそこへいつておくれよ」

「増六っていう船宿だな」

「そこで待ってればね、そこでだよ、そうすればあとからお嬢さんがゆくからって」

「おいおい」万三郎は閉口した。

「なんだかわけのわからないことばかりだが、そのお嬢さんというのはなんだい」

「おれだって知らねえさ」

少年はとなり返した。

「どこの人だか知らねえけど、きれいなお嬢さんがおれにそう頼んだんだ、それでおい小父さんの来るのを見張ってたんだ」

「その人は私の名を知ってるのか」

「ちえっ、あたりきじゃねえか」

少年は舌打ちをして云った。

「おいらはこっちへゆくぜ、小父さんは門前町の横丁へ入って、あいつらをまいていかなくっちゃだめだよ、わかったかい」

三

紀州家の二人をまくために、芝の山内さんないのほうまで遠まわりをした。

それから築地へ向ったので、増六へゆき着いたのはもう黄昏たそがれであった。増六は海に面した角地にあり、家は古いけれども、構えは大きかった。表側は二階造りで、裏には五つばかり座敷のある平屋が付いていた。もとは料理茶屋でもしていたのだろう、中庭もかなり広く、洒落しやれた配置の樹石のあいだに腰掛なども見えた。

万三郎は二階の部屋におおされた。まえにそう知らせてあったらしく、中年増ちゆうぞうのはきはきした

女房が出て、自分でその部屋へ案内をし、着換えも手伝ってくれた。

「こんなに汗になっていらっしやる、ちょうどお風呂が沸いたところですから、すぐおはいりなさいましな」

「それはなによりだ」

万三郎はそのまま風呂場へ下りていった。

——なにがどうしたたっていうんだらう。

風呂場の中でも彼は思い惑った。

——一家ぜんぶ焼死。

——どうしたわけだ。

風呂から出て、熱い茶を啜りながらも、万三郎はおちつくことができなかった。

「あの子供は捉まるとおれも殺されるといった、おれが殺されるって、誰に、なんのために殺されるんだ」

「独り言を云いながら、窓の外へ眼をやった。

昏れかかって明るい海の上を、帆をおろしながら帰ってゆく漁舟が、つぎつぎにはしり過ぎた。岸に沿って小さな堀があり、この増六の持ち舟であらう、屋根舟をまぜて、七艘ばかりも、やってあつた。

左のほうに明石町へ渡る寒さ橋が見え、いそぎ足に往き来する人の姿が、いかにも夕暮らしく、侘しく眺められた。

「麴町の家へいってみるか」彼はふとそう呟いた。

しかし立つ気はしなかった。少年はそこで待っていていと念を押した。そこで待っていればお嬢

さんがゆく、——お嬢さん。

「てんでわからない」

やけのように首を振り、彼はそこへ横になった。

「ぜんぜん夢のような話だ」

横になるとにわかに旅の疲れが感じられた。骨の節ぶしが抜けるようであったが、頭は少しずつおちついてきた。

「そうだ、ひとつ考えてみよう」

彼は眼を細くしながら、こう呟いて、自分が長崎から江戸へ出て来たいきさつを、静かに思い返してみた。

彼の家は八百五十石の旗本であった。

父は弥兵衛、母はぬいといったが、二人ともすでに亡^ない。長兄の徹之助が家督を継いで、大目付の書役^{かきやく}を勤めている。二兄の休之助は三年まえに、紀州家の甲野という家へ婿養子にゆき、それから一年して、万三郎も吉岡伊吾という旗本の家へ養子にいった。

吉岡伊吾には子がなかったが、養子をもったら夫婦にする筈の、親類の娘が一人いた。つまり夫婦養子になるわけであったが、万三郎が吉岡へゆくとまもなく、その娘が病死し、同時に万三郎は長崎勤番を命ぜられて、江戸を去った。

紀州家の甲野へいった休之助は、長崎などへやられた弟が哀れだったのだろう、しきりに手紙をよこして、彼を慰めてくれた。

——嫁になる筈の娘が死んだそうで、可哀そうだな。
などという手紙もあった。

四

——許婚に死なれたうえに、長崎などへやられて、泣きつ面に蜂じゃないか。
休之助は口の悪い兄であつた。

——しかしやけになることはない、この甲野にいい娘がいるんだ、おれの女房の妹で、名前はつな、年は十八になる。縹緲きんぎょうは姉よりいいし、気だてはやさしいし、おまけに小太刀の名手とぎている。どうだ、おまえこの妹をもらう気はないか。

そんなふうに書いて来たこともあつた。

万三郎はその手紙には心をひかれた。遠い土地に孤独な生活をしていたためかもしれない、また若い年齢のためかもしれないが、つなというその娘のことが、深く印象に残って、いつかしらひそかなあこがれをさえ感じるようになった。

——その人をもらってもいいです。

と彼は兄に返事を書いた。

——けれども長崎まで来てもらうわけにはいかないでしょう、勤番が解けるまで待つてくれるでしょうか。

そう書いたこともあつた。

すると三十日ほどまえのことであるが、その兄から急飛脚の手紙が来て、彼を驚かした。それは、すべての手続きを棄ててすぐに江戸へ来い、という文面であつた。

(役所のほうは花田の兄が手配をする、理由もこちらへ来てから話すが、非常に急を要するの

で、この手紙が着きしだい即刻そちらを出発するように)

そう繰り返してあった。

つまり出奔して来い、と云わんばかりであるが、万三郎は迷わなかった。休之助は信じていい人間だし、花田の兄も承知らしい。また、なによりも江戸へ帰りたいかった。

——江戸へ。

彼は命令どおり、すぐに支度をして、長崎をとびだしたのであった。

「待て待て、——」

と万三郎は起き直った。

「こいつは簡単じゃないぞ」

甲野の兄はなんのために彼を呼んだのであるか。そんなにも急に、出奔して来い、というほど性急に。

「問題はそこにある」

休之助には彼が必要であった。彼を必要とするなにかがあった。ほかの人間ではなく、特に万三郎を呼ぶ必要があったのだ。

——そのことは花田の兄も承知のうえである。

役所のほうは花田の兄が手配する、というからには、長兄の徹之助も知っているのに違いない。

——花田の兄は大目付の書役である。

こう思いながら、「大目付」という役柄がふっと万三郎の関心をひいた。そこになにかある、なにか大きな問題がそこにある、ということが感じられた。

もちろん漠然とした直感にすぎない。どんな問題があるとも想像はつかないが、なにかしら大

きな、しかも異常なものがある、という感じは彼の頭の中にしっかりと根を張った。

「火事は過失ではない」

万三郎はそう呟いた。

「過失なら一家ぜんぶが焼死するということはないだろう、おそらく外部から誰かのやった仕事だ、——休之助を生かしておけない理由があつて、失火とみせかけて、一家を暗殺したのに相違ない」

その点だけは間違ひではないだろう。小父さんも捉まると殺される、そう云つた少年の言葉がそれを裏書きしていた。

「——慥かに」

と云いかけて、万三郎ははつと、刀に手を伸ばしながら振返つた。

五

階段をあがって来る人の足音がしたのである。

考えていることがことなので、万三郎はどきりとし、左手に刀を取って身構えた。足音は静かにこつちへ来たが、それと共に、灯の明りが見え、若い女中が行燈あんどんを持って入って来た。

すでに暗くなつていた部屋の中は、それでにわかに明るくなった。

「おそくなつて済みません」

女中はこう云つて行燈の火を程よくかきたて、

「お客さまがみえておりますが、御案内してよろしゅうございましょうか」

「どんな客だ」

万三郎は女中の顔を見た。

「若いお嬢さまのような方でございます、頭巾をしていらっしゃるのでよくはわかりませんが、ごようすでみるとそのような」

「誰か伴れがあるのか」

「いいえお一人でございます」

万三郎は頷いた。

「お食事はどうぞ致しましょうか」

女中は去ろうとして訊いた。万三郎はあとで知らせると答え、立って行って、廊下からそっと店の表を見おろした。誰か外で待っている者がいはいはないかと思つたのである。しかし店の外にはそれらしい者の姿は見えなかつた。

まもなく客が入つて来た。

じみな色の縞の着物で、胸だかに帯をしめ、褌を取つていた。紫色の縮緬の頭巾をかぶつていたので、顔かたちはよくわからないが、高い鼻と、きれいに澄んだ賢そうな眼が、万三郎の注意をひいた。彼女は風呂敷包を持っていた。

「失礼ですが事情がありますのとすぐにおいとましなければなりませんので、頭巾のままお許しを願います」

娘はこう云つて坐つた。

「吉岡万三郎さまでいらっしゃいますね」

養家の姓を呼ばれて、彼はちよつとまごついた。